

〈導入〉

- 出展……………」
  - ジャンル……………」
  - 作者……………」
  - 成立……………」
  - 内容……………」
- ( ) (話) ( ) ( ) (巻)

〈本文〉

今は昔、小野篁と<sup>①</sup>いふ人<sup>②</sup>おはし<sup>①</sup>けり。嗟峨の帝の御時に、内裏に札を<sup>③</sup>立て<sup>②</sup>たり<sup>③</sup>けるに、「無悪善」と<sup>④</sup>書き<sup>④</sup>たりけり。帝、篁に、「<sup>⑤</sup>読め。」と<sup>⑥</sup>仰せられたりければ、「<sup>⑦</sup>読みは読み<sup>⑧</sup>候ひなむ。されど、恐れにて<sup>⑨</sup>候へば、え<sup>⑩</sup>申し<sup>⑪</sup>候はじ。」と<sup>⑫</sup>奏しければ、「ただ<sup>⑬</sup>申せ。」と、たびたび仰せられければ、『<sup>⑭</sup>さが<sup>⑮</sup>なくて<sup>⑯</sup>よからむ』と申し候ふぞ。されば、君を<sup>⑰</sup>呪ひ<sup>⑱</sup>参らせて候ふなり。」と申しければ、「これは、おのれ<sup>⑲</sup>放ちては、誰か<sup>⑳</sup>書かむ。」と仰せられければ、「さればこそ、申し候はじとは申して候ひ<sup>㉑</sup>つれ。」と<sup>㉒</sup>申すに、帝、「さて、何も、書き<sup>㉓</sup>たら<sup>㉔</sup>むものは、読み<sup>㉕</sup>て<sup>㉖</sup>むや。」と仰せられければ、「何にても、読み候ひ<sup>㉗</sup>なむ。」と申しければ、片仮名の「ね」文字を十二書かせ<sup>㉘</sup>給ひて、「読め。」と仰せられければ、「ねこの子のこねこ、ししの子のこじし。」と読みたりければ、帝<sup>㉙</sup>ほほ笑ませ給ひて、<sup>㉚</sup>事<sup>㉛</sup>なくて<sup>㉜</sup>やみ<sup>㉝</sup>に<sup>㉞</sup>けり。

※―(傍線) 動詞、〓(二重線) 形容詞・形容動詞、□助動詞

問一、本文中の動詞の「活用の種類」と「活用形」を答えなさい

①	いふ	( )	活用	形
②	おはし	( )	活用	形
③	立て	( )	活用	形
④	書き	( )	活用	形
⑤	読め	( )	活用	形
⑥	仰せ	( )	活用	形
⑦	読み	( )	活用	形
⑧	候ひ	( )	活用	形
⑨	候へ	( )	活用	形
⑩	申し	( )	活用	形

①①	候は	( )	活用	形
①②	奏し	( )	活用	形
①③	申せ	( )	活用	形
①④	候ふ	( )	活用	形
①⑤	呪ひ	( )	活用	形
①⑥	参らせ	( )	活用	形
①⑦	放ち	( )	活用	形
①⑧	書か	( )	活用	形
①⑨	申す	( )	活用	形
①⑩	給ひ	( )	活用	形
①⑪	ほほ笑ま	( )	活用	形
①⑫	やみ	( )	活用	形

問二、本文中の形容詞、形容動詞の「活用の種類」と「活用形」を答えなさい

①	なく	( )	活用	形
②	よから	( )	活用	形
③	事なく	( )	活用	形

問三、本文中の助動詞の「意味」と「活用形」を答えなさい

①	けり	(意味…)	形
②	たり	(意味…)	形
③	ける	(意味…)	形
④	たり	(意味…)	形
⑤	つれ	(意味…)	形
⑥	たら	(意味…)	形
⑦	て	(意味…)	形
⑧	な	(意味…)	形
⑨	に	(意味…)	形

〈現代語訳〉

今となつては昔のことだが、小野篁という人がいらつしやつた。嗟峨天皇のご在位の時に、(何者かが)内裏に札を立てたが、(その札には)「無悪善」と書いてあつた。帝が、篁に、「読め。」とおっしゃつたので、(篁は)「読むことは読みましょう。しかし、恐れ多いことでございますので、申し上げられませぬ。」と奏上したところ、「かまわないから申せ。」と、何度もおっしゃつたので、『さがなくてよからむ』と申ししておりますぞ。ですから、主上を呪い申し上げているのでございます。」と申し上げたところ、「こんなことは、おまえを除いては、誰が書こうか(いや、誰も書くはずがない。)」とおっしゃつたので、「それだからこそ、申し上げますまいと申したのです。」と申し上げると、帝は、「それでは、何でも、(文字で)書いてあるようなものはきつと読めるのか。」とおっしゃつたので、「何でも、きつと読みましょう。」と申し上げたところ、片仮名の「子」という文字を十二お書きになつて、「読め。」とおっしゃつたので、「猫の子の猫、獅子の子の獅子。」と読んだところ、帝は微笑なさつて、おとがめなく済んだ。